

働くこと自体を楽しむ！

起業は「コミュニティ・ビジネス型」で

定年後に借金までして、必死で会社を起すことは得策ではない。それよりも、自分の好きなこと、現役時代に存分にできなかったことをヒントに、周囲の動向にアンテナを立て、市民の力が必要な地域の課題に取り組み……。そんな、楽しく役立つ起業は、いろいろな仲間も引き寄せてくれます。

NPO 法人
「シニアワーくす Ryoma21」 理事長

松本すみ子

●まつもと・すみこ 1950年宮城県生まれ。2000年に団塊／シニア世代の動向研究・ライフスタイル提案などを事業とする有限会社アリア設立。著書『地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア～』（東京法令出版）ほか。

起業の仕方は多彩

シニア世代の起業には二通りあります。

一つは若い世代の起業と同様、資本金を用意して会社登録をし、創業すること。いまは定年が六十歳であっても、再雇用というシステムで六十五歳まで働けるようになりました。

しかし、給与は大幅に減り、役割や任務が明確でなく、満足できる働き方ではないということもあり、起業を目指す人はたくさんいます。

起業セミナーやシニア起業を支援するサロンにもたくさんの方が押し掛けています。ただ「起業したい」と「起業できた」は別物で、ほとんどのシニアは「したい」と思って参加しつつも、勉強で終わってしまう

ことが多いですね。

もう一つは、ボランティア的な意識から出発するケースです。「まだ社会とつながっていたい」と強く思ったときの一つの選択肢がこちらです。すなわち「儲けよう！」パターンではなくて、やりがい、生きがい、誰かの役に立つ満足感を優先する活動ですね。

ボランティアにも有償と無償があ

ります。最近では、何でもかんでも無償ではなくなってきた、ただだける場合はお金をいただいたほうが責任を自覚して、長続きするということ、有償が増えてきています。そうなる、単なるボランティアではなく、「コミュニティ・ビジネス」（*1）になっていきます。

このように、起業には一般経済界の中で事業を起す方法と、地域社会や社会貢献の枠の中で活動していく方法の二通りがあります。

お金もあって、資本金も出せて、なおかつやり手の方なら最初から会社を設立してもよいでしょう。一方、ボランティア型であっても、仲間や同好の士といろいろやりだしているうちにコミュニティ・ビジネスとして次第にお金になってきて、NPO 法人にしたり、株式会社にしたたりといったこともできます。

そういう意味で、シニアの起業は多彩なんです。必死になって生活費を稼がなくていい分、それぞれの人に合った起業のかたちがあります。だからシニア起業は面白いのですね。

地域発がうまくいく

ところが、これだけ多彩になっていることを、当の本人たちは気づいていないんですよ。

定年後もまだまだ働きたいと思ったり、再就職か、銀行からお金を借りて事業を起すかの二者択一しかないと思っている。実際、日本政策金融公庫から起業資金を借りる六十歳以上のシニアがすごく増えています。

でも私は、定年後は銀行からお金を借りるような事業は避けてほしいと思っています。それでうまくいく

のは、よほど才覚がある人です。そんな人なら、定年を待たず、とっくの昔に自分で会社を起しているはずですよ。会社を設立するかたちで起業することはカッコいいけれど、現役時代ずっと会社のミッションに従って動いてきただけの人が、定年になって自分でいきなり一から会社を立ち上げて成功させるのは、やっぱり難しいんです。

実際、私の周りで成功している方は、「コミュニティ・ビジネス」型がほとんどです。自分が住む地域の中で、趣味の仲間、あるいは同好の士との活動を大きくしていく方向でうまくいっているケースが多い。好きなこと、会社にいるときは思う存分できなかつたこと、「あれをやりたかつたな」とやり残し感のあること、そこから出発した起業は、やはりやる気も違います。まずは、そこ

(*1) コミュニティ・ビジネス 地域が抱える課題を、市民が地域資源を生かしつつ、ビジネスの手法によって解決しようとする社会貢献型事業のこと